

---

# Dystopia

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dystopia

### 【Nコード】

N7705R

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

2075年にこれを記す。  
2018年生まれ歴史家が残した短い手稿。そこに書かれていたのは、優しい人の心から生まれた「化け物」の存在だった。もしかしたら現代の我々が生み出してしまいかもしれない「化け物」のお話。

2075年12月にこれを記す。

が、「書き残すことに意味などあるのだろうか」という問いに、私はただ苛まれている。いかなる読み手をも想定しないテキストなど価値はない。これから記すものは、ただ現代を生きる私に不利益しかもたらさない。ならば、ただ自分の脳内で腐らせるべきなのかもしれない。

だが、私は歴史家であり、歴史を語ることに躊躇ちゅうしゆしてはならない人間である。そして、歴史家である私は知っている。後世の人々は必ずやこのテキストを欲するだろう。なぜなら誰もがこの歴史的対象について何ら書き残そうとはしないし、誰も書き残すことができないだろうからだ。

語るべき立場であり、語ることのできる立場でもある。ならば口をつくむ必要はどこにもない。なぜなら、私は歴史家だからである。歴史家の矜持にかけて、私は21世紀の日本に突如として現れた化け物について語らなくてはならないだろう。それが、私の歴史的使命だと信じて。

かの「化け物」がいつ現れたのか、私には分からない。

私の生まれは2018年である。その時には既にかの「化け物」は存在し、我々を抑圧していた。その感触はその時代を生きた私も持ち合わせている。だが、先人たちの調査によつて、2000年代の初頭にはかの「化け物」は存在しなかったことがおぼろげながら判明している。つまり、2000年代初頭から2018年の間に、かの「化け物」が誕生したようである、としか言いようがない。

どこで誕生したのかも完全には判明していない。どうやらその当時世界を席卷していた通信手段であるWWW(World Wide Web)の中から誕生したようである。このように、何事につ

けて“ようである”としか書かないことに、これを読んでいる未来の読者は不審がっていることだろう（あるいは、不審がつて頂けることを切に希望している）。だが、かの「化け物」は我々の知的活動をすべて食い破ってしまった。先ほど話に出たWWWとて、現代の我々は使用を厳しく制限されている。それどころか、あの「化け物」は我々のすべてを食い潰してしまった。私は歴史家を名乗っているが、そもそも私は歴史の何たるかを知らない。かの「化け物」は、歴史さえも飲み込んでしまったのである。

さて、ここから書き連ねていくことはすべて私の想像となってしまう。後世の歴史家たちは、きっと私のこの体を笑うことだろう。だが、想像を差し挟まないことにはかの「化け物」の巨大すぎる背中をおぼろげでも明らかにすることは叶わない。平にお許し願いたい。

よくはわからない。何が起こったのかは分からないが、2000年初頭から2020年にかけて、日本はなにか途轍もなく悲しい出来事に直面したのではないか。そう思えてならない。でなくば、かの「化け物」が誕生した経緯がわからなくなる。

そして、その悲しみを食い物にして、あの「化け物」が現れた。おそらくは、その「化け物」の正体は一人一人の善意だったのだろう。だが、その善意がやがて我々を食い潰すようになったとは何たる皮肉であろう。

その「化け物」とは、“不謹慎”という言葉である。

ある悲しい出来事が発生し、この国に生きる誰もが悲しみに暮れた。だが、いつまでも人々は悲しみの中に生きることができない。一人、また一人と現実に戻るべく悲しみという安住の場所から腰を上げようとした。だが、WWWを通じて、誰かがこう口にしたのだろう。

「不謹慎だ！」

いまだに悲しい思いをしている人がいるというのに、お前はその人の気持ちを考えずに日常に帰ろうというのか！ ふざけるな！

そうやってお前が不謹慎な言葉を吐いているその瞬間にも、悲しみの中に身を沈めている人が大勢いるんだぞ！ 不謹慎だ！

その発言者の名譽のために付言しておく。この発言は必ずしも間違ではない。私だって、その時代に居合わせたのならば首肯していたかもしれない。

その誰かの発した発言は、WWWの中で爆発的に増殖していった。まるでウイルスのように増殖していった「不謹慎」「不謹慎」「不謹慎」の大合唱がWWWの網目に溢れた。そして、悲しみの中から立ち上がるうとした人たちの手足をがんにがらめにした。やがて皆が「不謹慎」の名の元に他人を非難するようになった。

やがて、「不謹慎」という言葉はWWWの檻から抜け出し、遂には現実の我々にも迫ってきた。

「不謹慎だから」娯楽施設が次々に閉鎖されていった。皆が苦しんでいるときに享樂的な遊びをすべきではないとされたのだ。

「不謹慎だから」ちよつとの贅沢も許されなくなった。サラダには塩を振りかけるべきとされ、油分をたらずなどもつてのほかだとされた。

「不謹慎だから」政治家の発言が規制されることになった。政治家は往々にして己の言葉に責任が持てないのであり、存在からして不謹慎だという意見すらあった。

「不謹慎だから」テレビ、ラジオ、書籍に検閲がかかるようになった。そういったメディアは他人の気持ちなど考えない。利益を優先する企業に過ぎない。ならば我々で規制するのが穩当である、と。

「不謹慎だから」我々が表で自分の意見を表明できなくなった。そもそも、一個人が己の想いを外に発露するなど無意味であり必要のないことだ、それが理屈だった。

「不謹慎だから」太古の昔から2020年までの歴史を語る事が禁止された。歴史には戦争や理不尽な死が付き物であり、不謹慎であるとされたのである。さらに、2000年代初頭から2020年までに起こった出来事を語らせたくないという意図もあったのだ。

ろう。

当初、これらの抑圧はあくまで「運動」だった。自粛しましょう、そういうスタンスで迫ってきていた。だが実際には、反発する人間を「不謹慎」の言葉の嵐で圧死させていたのだった。

これら不謹慎の法的取り締まりが起こったのは、WWWで「不謹慎」コールを繰り返していた人々が社会的責任を帯び始めた2030年代のことである。私は当時多感な学生時代を過ごしていたが、「不謹慎」の大合唱に押し流されるようにして成立していく規制の嵐を、ただ茫然と見ているしかなかった。だから、私は歴史家でありながら歴史をほとんど知らない。ただ学校で教わった歴史の授業が好きだったがために歴史家を名乗っているに過ぎないのである。

もちろん、私が記憶しているだけでも五度ほどこの「化け物」に反発する動きがあった。だが、あの化け物はその反発よりもはるかにうず高く「不謹慎！」の壁を押し立てて、それらの反対意見を粉砕していった。もはやこの国に、「不謹慎」に勝るものは存在しなくなった。

やがて2050年に「不謹慎基本法」が成立する。この法律は散発的・逐次的に成立していた「不謹慎」絡みの法律を総括するものであった。が、やがてその「不謹慎基本法」に対する罰則規定が強化されてゆき、遂には今年2075年、基本法の罰則規定の改定、「最高刑は死刑」と書き込まれることとなった。さらに、死刑が宣告された者の残すものはすべて「不謹慎」とされ、その人物が作り出したもの、喋ったこと、あるいは体や髪の毛一つに至るまで、すべて破棄されることとされた。なぜなら、不謹慎なものはこの日本に存在してはならないからだ。

かくして日本は、「不謹慎」という「化け物」にすべて飲み込まれてしまったのである。

未来の読者諸兄よ。

我々は何を間違ったのだろうか？

私の想像が正しいのならば、あの「化け物」を醸造してしまったのは、誰かの優しい心はずだ。なのに、現在ではその優しさが我々の命を奪わんと大鎌を構えている。

我々は何を間違ったのか。なぜ優しい心が我々を殺すのだ？

健全なる思考を持ち、健全なる思想のもとに生きているだろう（いや、健全なる思想のもとで生きていてほしい、というほうが正確か）未来の読者諸兄には、我々が何を間違ったのかは自明のことなのだろう。だが、私には分からないのである。なぜなら、私たち2075年の我々は、何の定規を持ち合わせていない。比較するのに必要な知識や経験則はすべて、「不謹慎」という「化け物」に飲み込まれてしまった。もはや我々を規定するのはその「化け物」以外にない。

だが、分かっていることが一つだけある。

私たちは、何かを間違えてしまったのだ。

賢明なる未来の歴史家よ、無力な歴史家に代わり、解き明かしてほしい。

私たちが、何を間違えてしまったのかを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7705r/>

---

Dystopia

2011年10月3日23時42分発行